



第 76 回（平成 24 年 8 月 8 日）定例会の研究発表要旨

「手稲郷土史から特筆したい事柄…もう一度

①軽石軌道 ②紅葉山砂丘 ③村上藤吉」

富丘 野村 武雄氏



1 第 75 回定例会で吉岡講師から軽石軌道の話があり帰り道で「軌道は水害で流失被災がなかったろうか」（川崎会員）と私に質問された。『軌道』は手稲軽川駅と石狩花畔駅間 8.4km を道道石狩手稲線上の東側に沿い一直線に大正 11～昭和 11 年まで走っていた。

この土地には『紅葉山砂丘』が手稲前田～石狩生振（おやふる）の間を海岸線から 5～6km 離れた地域に海岸線と平行して南西から北東に連なり長さ 15km の大砂丘列。標高は紅葉山 17.8m、南 8～2 線 5～6m、砂山、新川橋、前田小付近

7～4m で小高い地形である。

大人工排水『新川』はほぼ直角に、この砂丘列を新川中央橋の地点で横断。同時に発寒川を南北に分断した。（明治 19 年以後）

『発寒川』は縄文時代（5,000 年前）以前から軽川、三樽別川、富丘川、中の川と合流、手稲山を削り紅葉山砂丘の東側沿いに流れ手稲や札幌の海や潟を土砂や泥炭で埋め続け石狩川に合流していた。（現在、この 4 川は纏まって新川に注ぐ）

道道とその札幌側砂利路上に細目の鉄道線路を敷いた『軌道』は紅葉山砂丘列のほぼ 7m の標高を走っていた。新川橋以北は砂丘の西肩側、以南の手稲前田部分 2km 余は砂丘東肩側へと移る。砂丘が海岸線沿いで西へ曲がり橋も砂丘の小高い地点にあるためか。

次に札幌管区気象台資料（大正 10～昭和 11 年 4～11 月）月毎、年間、1 日最高雨量とその日を見ると軌道の営業年は比較的安定してる。文献資料でも新聞記事、古新聞き取りでも水害特記事項は見えない。また経験的にも昭和 30～40 年代の記録的大水害時でも、道道石狩手稲線は、流失冠水せず避難・救援路として役立った。

結論として軌道と道道が砂丘の小高い地点を走り当時の気象条件にも助けられ水害を免れたと言えよう。

この砂丘上と周辺は現存する防風林に見る豊かな自然と動植物を育み縄文人・擦文人・アイヌ人による『紅葉山砂丘文化圏』（仮称）と言うべき一大狩猟、漁猟、採集埋蔵文化遺跡地であり、その後町村農場、前田農場、極東農場も立地した。現在は石狩市民、手稲区民数万人の住宅地、農地として縄文人、明治、大正、昭和人の多くの遺跡・ロマン・夢を深く秘めて栄えている。

2 上仙会員から手稲温泉光風館と 33 観音像の寄進者『村上藤吉』名を確認発表された。最後の町長蓑輪早三郎は「軽川の侠客三人」として『村上藤吉』を挙げる。「軽川へ行って藤吉さんとこさ顔出さねいと、仕事ができねえ」と言われ、藤の湯と私設消防団創始者としてしか町史に記されない忘れられた謎多い人物。宮崎宗右衛門、船木與八と共に今後の郷土史研究の課題としたい。

四國の風土—お遍路で見えてきたもの

星置 後藤 崇和 氏

① お接待について

北海道には体験できないお接待についてお話します。お遍路をしていると、突然声を掛けられ「お接待です」と言われて、食べ物・ティッシュ・お金等を手渡されます。これはお遍路さんを弘法大師と見立て、施しをする行為で、その施しはやがて自分に戻ってくるという考え方に繋がっています。お遍路の基本とも言われている「同行二人」の発想つまりお大師様と一緒に歩いているお遍路さんに施しをすることによって、自分の代わりに霊場にお参りしてくれるという感謝の気持ちを表す行為だと言われています。この時に遍路は相手に納札を渡します。この納札は、受け取った方と死出の旅路を共にすると言われています。



② 修行の旅について

通常お寺では、本堂でお参りしますが、四国遍路に於いては、本堂と大師堂の二箇所でお参りします。これは四国遍路の成立過程に於いて、歴史的な空海が宗教的な空海＝弘法大師に成ったことにより、大師に対する敬慕が「同行二人」つまり、お大師様と一緒に歩いている・お大師様に守られている・決して私たちを見捨てないという思いが大師堂へのお参りになったものです。この「同行二人」が四国遍路の三信条の一番目で、次に何事も修行と心得て愚痴・妄語を慎み、最後に今生きているこの世で受ける仏の恵みに感謝し、巡拝しながら一つずつ煩惱を消していこうということです。又、誰にでも直ぐに実行できるのが、お金のかからない施しである「無財七施の修行」です。①眼施・②和顔施・③言施・④心施・⑤身施・⑥牀座施（しょうざせ）・⑦房舎施（ぼうしゃせ）です。

③ 今も残る「神話空間」

聖地として文献に現れるのが平安時代初期のことです。空海が山岳修行をしたのが8世紀後半です。それ以来修行の場としての辺路（へじ）が、遍路の道として現在も、色々な方達の努力と大師信仰に

次回の予定

次回（10月10日）は、吉田寛義会員の「昭和10年代の石狩湾開発計画」と永井道允会員の「北海道の方言を考える」の2つの発表を予定しております。

会場は、視聴覚室です。

よる巡礼が重なって四国遍路の基礎となりました。周囲を海で囲まれた四国は、隔絶された島であっただけに豊かな自然や暖かい人間関係が今なお残っています。それは近代が失ってしまった特別な価値を持った空間、すなわち「現代の神話空間」と言えるでしょう。自然に触れながら歩き人と触れ合うことで、生きる力や自信を取り戻し、そこで得た体験から新しい神話がまた生まれることでしょう。